

レモンチヌ生産 広島大と連携へ

尾道水産青年協 成分解析に期待

チヌ(クロダイ)の消費拡大を目指す尾道市の尾道水産青年協議会は、レモン果汁を混ぜた餌を与えて育てる「レモンチヌ」の試験生産を、広島大(東広島市)と連携して進める。県はチヌの漁獲量とレモンの生産量がともに全国1位。爽やかなレモンとのコラボ効果を成分分析などで科学的に説明し、ブランド化とPRにつなげる。

24日に尾道市の尾道漁協で関係者の初会議があり、10人が参加。レモンがチヌ独特の臭みを抑える効果があるかどうかわやうま味成分の変化などを、科学的に検証する方針が報告

チヌ(クロダイ)の消費拡大を目指す尾道市の尾道水産青年協議会は、レモン果汁を混ぜた餌を与えて育てる「レモンチヌ」の試験生産を、広島大(東広島市)と連携して進める。県はチヌの漁獲量とレモンの生産量がともに全国1位。爽やかなレモンとのコラボ効果を成分分析などで科学的に説明し、ブランド化とPRにつなげる。

8月から来年7月まで研究を続ける予定。試験生産は昨年スタート。近海で捕れたチヌを同市向島町沖のいけすに入れ、レモン果汁を混ぜた餌で蓄養している。試食会で「生臭さがほとんどない」と評判は上々だった。同協議会と市が科学的な裏付けを求めて広島大の地域連携推進事業に応募し、決まった。2013年の県のチヌ漁獲量は全国1位の382トン。同市は県内2位の産地だ。ただ、時期によって臭みが強まることや、マダイの養殖技術の発達などで評価は低下。1キロ当た

りの市場価格は十数年前の約1500円から現在約300円まで下落している。

担当する広島大大学院生物圏科学研究科の海野徹也准教授(52)は「チヌ全体のイメージアップにつなげたい」。レモンチヌの生産者で同協議会の山本秀徳さん(55)は「成分解析でお墨付きをもらいたい」と期待する。

(渡辺裕明)